

# 藤戸

世阿弥作

前

ワキ 佐々木盛綱

シテ 漁夫の母

後

ワキ 前に同じ

シテ 漁夫

地は 備前

季は 三月

ワキ次第

「春の湊の行末や。く。藤戸の渡りなるらん。

詞

「是は佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に。児島を賜はつて候。今日は日もよく候ふ程に。唯今入部仕り候。

道行

「秋津洲の。波静なる島廻り。く。松吹く風も長閑にて。実に春めける朝ぼらけ。船も道ある浦づたひ。藤戸に早く着きにけり。く。

詞

「如何に誰かある。

トモ

「御前に候。

ワキ

「皆々訴訟あらんずる者は罷り出でよと申し候へ。

トモ

「畏つて候。如何に皆々たしかに聞き候へ。此浦の御主佐々木殿の御入部にて有るぞ。何事も訴訟あらん者は罷り出で、申し候へ。

シテ一声

「老の波。越えて藤戸の明暮に。昔の春の帰れかし。

ワキ

「不思議やな是なる女の。訴訟ありげに某を見てさめぐと泣くは何事にてあるぞ。

シテ「海士の刈る藻に住む虫の我からと。音をこそ泣か  
め世をば実に。何か恨みん本よりも。因果の廻る  
小車の。弥猛の人の罪科は。皆報いぞといひなが  
ら。我子ながらも余り実に。科も例も波の底に。  
沈め給ひし御情なさ。申すにつけて便なけれども。  
御前に参りて候ふなり。」

ワキ「何と我子を波に沈めし恨みとは更に心得ず。」

シテ詞「さてなふ我子を波に沈め給ひし事は候。」

ワキ「あゝ音高し何とく。」

シテ「なふ猶も人は知らじとなふ。中々に其有様を顕し  
て。跡をも弔ひ又は世に。生き残りたる母が身を  
も。訪ひ慰めて給ひ給はゞ。少しは恨みも晴るべ  
きに。」

下歌「いつまでとてか忍ぶ山。忍ぶかひなき世の人の。  
あつかひ草も茂き物を。何と隠し給ふらん。」

上歌「住み果てぬ。此世は仮の宿なるを。く。親子と

て何やらん。幻に生れ来て。別るれば悲しみの。  
思ひは世々を引く。絆と為つて苦しみの。海に沈  
め給ひしを。せめては訪はせ給へや。跡弔はせ給  
へや。

ワキ詞

「言語道断。かゝる不便なる事こそ候はね。今は何  
をか包むべき。其時の有様語つて聞かせ候ふべし。  
近う寄つて聞き候へ。さても去年三月廿五日の夜  
に入りて。浦の男を一人近づけ。此海を馬にて渡

すべき所やあると尋ねしに。彼者申すやう。さん  
候河瀬の様なる所の候。月頭には東にあり。月の  
末には西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と  
思ひ。家の子若党にも深く隠し。彼者と唯二人夜  
にまぎれ忍び出で。此海の浅みを見置きて帰りし  
が。盛綱心に思ふやう。いや／＼下郎は筋なき者  
にて。又もや人に語らんと思ひ。不便には存じ、  
かども。取つて引き寄せ二刀さし。其まゝ海に沈

めて帰りしが。さては汝が子にてありけるよな。  
よしく何事も前世の事と思ひ。今は恨みを晴れ  
候へ。

シテ詞 「さてなふ我子を沈め給ひし。在所は取り分き何処  
の程にて候ふぞ。

ワキ 「あれに見えたる浮洲の岩の。少し此方の水の深み  
に。死骸を深く隠しゝなり。

シテ 「さては人の申しゝも。少しも違はざりけり。あの

辺ぞと夕波の。

ワキ 「夜の事にて有りし程に。人は知らじと思ひしに。

シテ 「やがて隠れはなき跡を。

ワキ 「深く隠すと思へども。

シテ 「好事門を出でず。

地 「悪事千里を行けども。子をば忘れぬ親なるに。失  
はれ参らせし。子はそも何の報いぞ。

クセ 「実にや人の親の。心は闇にあらねども。子を思ふ

道に迷ふとは。今こそ思ひ知られたれ。本よりも定めなき。世の理りはまのあたり。老少不定の境なれば。若きを先立てゝ。つれなく残る老鶴の。眠りの内なれや。夢とぞ思ふ親と子の。二十余りの年並。かりそめに立ち離れしをも。待ち遠に思ひしに。又いつの世に逢ふべき。

シテ  
「世に住めば。憂き節繁き河竹の。

地  
「杖柱とも頼みつる。海士の此世を去りぬれば。今

は何にか。命の露を懸けてまし。ありがひも有らばこそ。とても憂き身なる物を。亡き子と同じ道に。なして給ばせ給へと。人目も知らず臥し転び。我子返させ給へやと。現なき有様を。見るこそあはれなりけれ。

ワキ詞  
「あら不便や候。今は恨みてもかひなき事にて有るぞ。彼者の跡をも弔ひ。又妻子をも世に立てうずるにてあるぞ。まづ我屋に帰り候へ。如何に誰か

ある。余りに彼者不便に候ふ程に。さまぐの弔ひをなし。又今の母をも世に立てうずるにて有るぞ。其由申し付け候へ。(中人)

ワキ歌

「さまぐに。弔ふ法の声立てゝ。く。波に浮寐の夜となく。昼とも分かぬ弔ひの。般若の船のおのづから。其纜を説く法の。心を静め声を上げ。

ワキ

「一切有情殺害三界不墮惡趣。

後ジテ

「憂しや思ひ出でじ。忘れんと思ふ心こそ。忘れぬ

よりは思ひなれ。さるにても身はあだ波の定めなくとも。科によるべの水にこそ。濁る心の罪あらば。重き罪科も有るべきに。よしなかりける海路のしるべ。思へば三途の瀬踏なり。

ワキ

「不思議やな早明方の水上より。けしたる人の見えたるは。彼亡者もや見ゆらんと。奇異の思ひをなしければ。

シテ詞

「御弔ひは有難けれども。恨みは尽きぬ妄執を。申

さん為に来りたり。

ワキ 「何と恨みを夕月の。其世に帰る浦波の。

シテ詞 藤戸の渡り教へよとの。仰せも重き岩波の。河瀬  
の様なる浅みの通りを。

ワキ 「教へしまゝに渡りしかば。

シテ 「弓矢の御名を揚ぐるのみか。

ワキ 「昔より今に至るまで。馬にて海を渡す事。

シテ 「希代の例なればとて。

ワキ 「此島を御恩に賜はる程の。

シテ 「御よろこびも我故なれば。

ワキ 「如何なる恩をも。

シテ 「給ふべきに。

地 「思ひの外に一命を。召されし事は。馬にて海を渡  
すよりも。是ぞ希代の例なる。さるにても忘れが  
たや。あれなる浮洲の岩の上に。我を連れて行く  
水の。氷の如くなる刃を抜いて。胸のあたりを刺



し通し。刺し通さるれば肝魂も。消えくとなる  
処を。其まゝ海に押し入れられて。千尋の底に沈  
みしに。

シテ「をりふし引く汐に。

地「をりふし引く汐に。引かれて行く波の。浮きぬ沈  
みぬ埋木の。岩のはざまに流れかゝつて。藤戸の  
水底の。悪龍の水神となつて。恨みを為さんと思  
ひしに。思はざるに御弔ひの。御法の御船に法を

得て。即ち弘誓の。船に浮へば水馴棹。さし引き  
て行く程に。生死の海を渡りて。願ひのまゝにや  
すく。彼岸に至りく。く。成仏得脱の  
身となりぬ。成仏の身とぞなりにける。